示現寺

日本のナイチンゲール
瓜生岩子が抱いた慈愛と信念

東京の浅草公園をはじめ、熱塩加納村の示現寺、福島市の長楽寺など県内各地に、慈愛に満ちた笑顔を浮かべているおばあさんの銅像があります。この人こそが、日本の社会福祉の先駆者、瓜生岩子です。明治時代の初め、岩子は恵まれない人々、特に子どもたちのためにその一生を捧げ、「日本のナイチンゲール」とも称されました。ここでは、岩子の母の実家で、岩子の足跡を語り継いでいる瓜生悦子さんにお話を伺いながら、岩子の慈愛に満ちた姿と、分け隔てない献身の精神を振り返ってみました。

■心に芽生えた救済の決意

岩子は小田付村（現・喜多方市）に生まれましたが、小さいころに父を亡くし、その上に家も火災で焼けてしまい、母の実家に身を寄せて少女時代を過ごしました。14歳になって、会津藩の医者で叔父の山内春瓏（しゅんろう）のもとに預けられた岩子は、叔父の手伝いをしながら、村人が貧しいために子どもを堕胎する悪習を目にします。そんな状況の中で、貧富の差なく病人を世話し、村人に堕胎を止めるよう教え諭す春瓏の姿を見た岩子は、人の命の尊さや人に尽くすことの大切さを学んだのです。「この時、岩子の心に人々の救済に尽くす気持ちが芽生え、それが将来の活動の原点になったのではないでしょうか」と、悦子さんは語ります。

岩子の不幸はなおも続きます。17歳で結婚しましたが、若くして夫と死に別れ、心の頼りとしていた春瓏と母までがこの世を去りました。子どもとともに残され、心の支えを失った岩子は嘆き悲しみました。いっそ尼になりたい……そんな心境を、母の菩提寺である示現寺・隆覚禅師に打ち明けたところ、岩子は一喝されます。「世の中には、お前以上に辛苦に耐えて生きている人、親も子もなく途方に暮れている人がいる。お前には、なすべきことがあるのではないか」――こう諭された岩子は、たとえ悲しみのどん底にあろうとも、自分の不幸を嘆くのではなく、もっと苦しい人々を救おうと、心に誓ったのです。

慶応4年（1868）、戊辰戦争が始まると、岩子は大八車に薬や衣料、食料を手に入れられるだけ積み、戦地の若松へと赴きます。ここで岩子は、自分の身の危険や疲れも省みず、敵味方の別なく負傷した人々を看護しました。「お前はだれの許可を得たのだ」そういう西軍の隊長に対しても、岩子は、「けがの手当に、だれの許可もいりませぬ」と、決して屈することはありませんでした。

示現寺の境内に、岩子の像が建っています。慈愛に満ちたその姿は、後世の人々に無言の教訓を与えています

孫の祐次郎と。祐次郎は後年、「岩子は身は乏しくも心はいつも富み足っておった」と語っています（右は岩子が産声をあげた母の実家、明治時代の山形屋旅館）

示現寺境内にある岩子の墓は、渋沢栄一の書によるもの。質素な墓石が、決して偉ぶることのなかった岩子の人柄を偲ばせます

瓜生岩子（1829～1897）日本の社会福祉事業の母・岩子の素朴で柔和な人柄には、だれもが自然に頭が下がり、その反面、どんな難事にあっても悲観せず、びくともしない強い精神を持っていたと伝えられます

■熱い思いで活動に奔走

これらの岩子の献身には、西軍の参謀・板垣退助も深く感銘し、戦火の中で岩子とひと目会おうとしたほどでした。岩子の活動は、これにとどまりません。戦後、食べ物が極端に少ない中、岩子は農家からくず米を分けてもらって水飴をつくり、病人や子どもたち、お年寄りに元気を出してもらおうと分け与えました。「水飴は今の栄養剤や点滴の役割を果たしたのでしょう」と、悦子さんは話します。その行動は、決して暮らしの余裕から出たものではありません。岩子は、貧困の底にありながらも、すべてを貧しい人々に捧げ続けたのです。さらに岩子は、子どもたちのために幼学校をつくろうと思い立ちます。西軍に逆らった会津藩士の子弟の教育に、当時の民政局は難色を示しましたが、岩子は毎日のように局に通い、ついに願いが聞き入れられました。しかし教師に迎える浅岡源三郎が、藩校・日新館の教師、つまり白虎隊の教育者であったため、江戸送りの罪に問われ、開設に「待った」が掛かりました。万事休すと思われましたが、その時、岩子の長男・祐三が浅岡の身代わりとなり、尊敬する母の熱意をかなえたのです。幼学校は明治2年（1869）に開設されました。

その後、岩子は貧民、老人、孤児を救うためにつくられた救養会所（東京・深川）で、救護の研究指導を受けました。そして帰郷後は、慈善活動の必要性を訴えながら、救養会所会津支部の設立に奔走しました。これは実現には至りませんでしたが、岩子は決してくじけることなく、裁縫教授所を開き、婦女子の自立を助けながら生活困窮者に手を差しのべ、堕胎・棄児の悪習をなくすよう説き続けました。これらの地道な活動が、やがて大きく実を結びます。

■差しのべる手を未来へ

国家の力が社会福祉事業に向けられることを願っていた岩子は、明治24年（1891）の第一回帝国議会に、女性として初めての請願書「婦人慈善記章の制」を提出し、婦人層の活躍を促すことを考えました。この頃、岩子の活動は中央の名士にも知られ、板垣退助夫人をはじめ、多くの上流婦人の共感を得るに至っていたのです。同年、岩子は、渋沢栄一の要請を受け、東京養護院の幼童世話係長を約半年務めました。その後、帰郷した岩子の助言により、若松・喜多方・坂下と次々と育児会ができ、産婆研究所も設置。明治25年（1892）には福島で「瓜生会」を結成。これによって、岩子を中心とした、福祉を目的とする組織が、初めて誕生しました。岩子の永い努力が実を結んだのです。さらに翌26年には福島鳳鳴会（福島愛育園の前身）に育児部を設置、また同年、若松で、生活困窮者のために私立済生病院を開設しました。ここでは、若松の医院の一書生であった野口英世が薬局を手伝い、母シカも働いていました。心臓病を患った岩子は、病床にあっても孤児や貧民の救済を説き続けました。その病状は皇后陛下にも届き、陛下のご内意による御見舞品が下賜されるという病床生活を過ごしましたが、明治30年（1897）、ついに永い眠りにつきました。

「人の命に貧富の差はない」という主張を貫き、一生を福祉に捧げた岩子――。慈愛と信念を貫いたその業績があってこそ、今日の福祉があると言っても過言ではありません。現代は、岩子の時代とは比較にならないほど豊かになり、社会福祉の組織も整えられましたが、これからもわたしたちは、日本中、そして世界にも目を向け、救いを求める人々に手を差しのべなければなりません。岩子の像は、いまのわたしたちの姿を、優しく見守り続けています。

第一回帝国議会に岩子が提出した、女性として初めての請願書「婦女慈善記章の制」

岩子が、世話をする子どものために、自ら包帯くずを紡いで作った厚子

明治29年（1896）に、日本女性初の藍綬褒章を受章

県社会福祉協議会では、岩子の偉業を永く後世に伝えるため、岩子の精神にふさわしい社会福祉功労者を顕彰する「瓜生岩子賞」を平成5年に創設しました。

瓜生悦子さんは、岩子の足跡を紙芝居で地域の内外に伝え、後世に語り継ぐ活動を続けています

岩子没後百年を記念し、地元の熱塩加納村に記念碑が建てられました